

平成三十一年一月投句

灯消し鸞替いよよ始まりぬ

補ひてともに健やか寝正月

境内に声かけ合ふて鸞替へて

節子

ぬた場らし跡の乾けり寒施行

真理子

初めての餅と喜ぶ礼者かな

まつさらの十年開く初日記

偶然を装ひ二人初詣

浮子に乗る鶺に迫りゆく鴨の陣

傷心の行く山道に冬苺

勝利

鬼すべの松明を曳く煤の顔

由紀子

御降や独り住まひに音もなく

写楽絵の目ほどふくらみ芽水仙

年ごとに願ひつましく初明り

初明り素直な心持ちて句を

光子

夢に覚めしんしんと聞く雪の音

平成三十一年二月投句

春雨の雫たらすや軒の鳥

立春の光差し込む地下遺構

だんだんと細くなる径いぬふぐり

節子

夫好むことに相槌寒明くる

真理子

靴を脱ぎ汀に拾ふ若布かな

戸口より戸口へ走るうかれ猫

猫さかる独居老人うとうとと

鬼やらひ鬼のひれ伏す神楽殿

撫でてみて逆撫でてみて猫柳

勝利

瀬の音の微か野梅の紅仄か

由紀子

見上げればさわりさわりと春の鷺

貯水池の底のひび割れ笹子鳴く

夢うつつ行きつ戻りつ春の風邪

八百正は大根献じ鬼やらひ

光子

まんさくや修験の山の道標

平成三十一年三月投句

ぞくぞくと人山寺の御開帳

木蓮の花麗しくあつけなく

行きずりの人に櫛の芽いただきぬ

節子

蛸壺の並びし浜や春の昼

真理子

春の川沿ひにかけっこ通学路

ひよいと足出して飯蛸壺の口

揺るるはずなく揺らめきて春障子

椿落つ一夜造りの鬼の磴

戒めかはた励ましか春の雷

勝利

早春のひかりを集め摩崖仏

由紀子

揃へ置くヒールに乾き春の泥

風光る山に二つの摩崖仏

潮調子見極め白魚漁師かな

白魚築吾が編みたると漁師かな

光子

埋め戻す遺構の上の草青む

令和元年四月投句

三角の屋根の先より春の月

半身を晒し砂出す浅蜷かな

下校の子鵲の巣を教へくれ

面接の固き机に窓のどか

桃の花将門塚はこの近く

街の灯はみな蠢いて春の闇

遺言めく母の言葉も春灯下

花冷の夜にも母の厨事

気がかりをみな話しおき夜半の春

節子

折り畳みテーブル花下に親子連れ

棹を手に船頭花下の船着場

雪洞を連ね境内八重桜

遥か来しアルハンブラの春灯

乗り継ぎの空港に見る春の雪

中世の城春翳のアラベスク

光子

真理子

由紀子

令和元年五月投句

登校路踊子草の曲がり角

遺産とは成りし廃坑忍冬

ハイウェイの風向示す鯉のぼり

節子

サンダルを値切りし頃も街薄暑

真理子

川岸に観覧席も祭客

嫁となる我を迎えし祭の夜

川渡る水道管に蔦若葉

つばくらめ平家滅びし渦を飛ぶ

初恋の芥子粒ほどや祭の夜

勝利

筑豊や川に神輿の二基荒ぶ

由紀子

忍冬の花の香ゆらと宵の縁

すいかずら古墳壁画の謎多し

散りかかるもの散り尽くし青嵐

母の日や長きおしゃべりいつになく

光子

リハビリの二人三脚樟若葉

令和元年六月投句

城址の百足虫と水城見下ろしぬ

六月の月熟るゝかに山の端に

ががんぼの足だけ残るガラス窓

節子

紫陽花の参道に傘またひとつ

真理子

頼りなく厨を歩く子蠅螂

夾竹桃褒められもせずなほ元気

声援に応へる鵜匠目は向けず

残鶯や夕日の端に鳴きつくす

焼酎の襖に匂ひ立つ実梅

勝利

暮れがての紫陽花山にサキソフォン

由紀子

拝殿の裏は物置宮祭

白ばかり浮立つ夜の菖蒲池

残鶯や日々穏やかにとぞ願ふ

慈しみ日々過ごせるや額の花

光子

明易や眠る菓を飲みをれど

令和元年七月投句

寝袋を六本並べバンガロー

夫と犬それぞれ寝莫塵よく眠り

囲碁を打つ商店街の涼み台

節子

鬼百合に雨降り止みて降り止みて

真理子

重たげにうなだれ雨の日車草

バンガローこんなところに泊まるとは

川蜻蛉揺れ綺羅と揺れ背の緑

悔いなしと言えぬ看取りや梅雨深し

花町の門の跡地にねむの花

勝利

百合好きな母に最期の百合を置く

由紀子

ひび割れて白き泥道凌霄花

流鏝馬の馬場に清めの白雨かな

星の出で少し恋してバンガロー

デイケアの模擬縁日のラムネかな

光子

眠られぬ夜の香水の重たかり

令和元年八月投句

窓閉めてまわる夕立一軒家

雷鳴に動き固まる幼児かな

それなりの甘さと甜瓜を売る

送火の灰は君のと同じ色

慣れてきし霊棚作り手は老ひぬ

田水守り畔は銀河に沿うてをり

静かなる余生を得しや霧深し

デイケアの休みの昼のビールかな

秋暑しもういぢわるは言はぬこと

節子

なつかしき父の筆跡星月夜

好きなことしていてもなほ秋暑し

見えもせぬ乳を吸ふ嬰稻の花

砂利道の乾きし音や夏越祭

射手は汗見せず三的射ぬきをり

丑三つの空に流星つづけざま

光子

真理子

由紀子

令和元年九月投句

開聞岳裾野を濡らす秋の潮

清掃の公園おんぶバツタ飛び

秋の潮島につながる砂の道

節子

鉦叩さみしけれども庭豊か

真理子

トロ箱に曲がる太刀魚重ねられ

逸れ鷹低く流れて尾根に入る

太刀魚を切る包丁の無頓着

鍾乳洞幾千年を水澄みて

稲妻に曝け出されし夜の雲

勝利

釣り糸の太刀魚銀に波打てり

由紀子

偲ぶ恋問ひつつ分け入り竹の春

稜線を神域となし今日の月

一日の無事を安堵や鉦叩

無造作に太刀魚売りて港町

光子

敬老の日の母の声大きくて

令和元年十月投句

移り来て縁側で見る虫送

一叢の花に飽くなき秋の蝶

扇風機の残る拝殿菊日和

勝利

恋愛は下手で夜長のシューベルト

由紀子

引越して空部屋の窓秋の声

秋潮の退いて砂鉄のひかる浜

古城址の堀の草揺れ秋の声

秋晴に病院三つはしごして

光子

お休み

節子

駄々こねる夫なだめつつりんごむく

姉の味噌手作りなりし茸汁

葱の種土産に旅の秋暮れて

真理子

斎田を誇りの村や虫送

令和元年十一月投句

赤レンガ色を濃くして夕時雨

夫婦岩幣白々と神迎

山寺の山門静か石露の花

節子

耳遠き女あきんど冬紅葉

真理子

静かなる白丁の列神迎

笑み湛え説くや小春の宣教使

鶉騒ぎ手水の音の静かなる

残照の立山連峰神迎

葡萄棚ワインレッドに紅葉し

勝利

錦秋やスイッチバツクの駅に降り 由紀子

裏路地にパン焼く匂ひ小春風

雲去りて初冠雪の奥穂高

天から降りそそぎたるごと石露の花

冬立ちぬ恙無き日の続くやう

光子

小春日の温泉宿にゆるりひとときを

令和元年十二月投句

氣遣ひの我慢の果ての大きくさめ

冬うらら河童寝そべる川下り

赤子抱く母親父親マスクして

節子

やわらかな冬日欄間の透かし彫

由紀子

リビングに機影よぎるや日脚伸ぶ

掘割に戸毎の汲水場石蔭の花

身じろぎもせず冬の綿雲五枚

大綿のむこうの山の静かなる

勝利

お休み

真理子

大綿をはたける丈になりたしと

大綿や猫の昼寝のまだ続き

冬芽立つ石垣のみの夢のあと

光子

吾を頼りきつたる夫や冬帽子